

仲間と協力し合い、意欲的・主体的に取り組む体育学習のあり方

大分県佐伯市立佐伯小学校

全校児童数	293名(男子152名 女子141名)		
全クラス数	14	教職員数	31名
体育専科教員訪問学校数			8校
訪問校	松浦小、東雲小、渡町台小、宇目緑豊小 木立小、八幡小、米水津小、下堅田小		
体育専科教員名		御手洗貴裕	

Plan：取組時の課題と計画

1 取組時の課題

- (1) これまでの体力テストでは、県平均に比べ男女とも50m走・20mシャトルラン・立ち幅跳び等が低い傾向にある。
- (2) 低学年のうち身に付けてほしい基礎感覚・用具操作能力の定着が不十分である。
- (3) 協力し合って「教え合う・励まし合う・助け合う」活動(話し合い活動)の定着が不十分である。
- (4) 振り返りで、お互いを認め合う・感謝し合う発表が少ない。

2 取組の計画

- (1) 児童実態の把握
- (2) 本校での各領域における指導(1～3学期)
- (3) 各学年との授業改善に向けての定期的な話し合い(2ヶ月に一度)
- (4) 訪問校における体育指導(1～3学期)
- (5) 児童へのアンケート調査を行い、運動への意欲・興味・関心を検証

Do：実践内容

1 運動量の確保

どの単元の授業においても、一人ひとりの子どもの運動量を意識して授業をくんできた。基本的な流れは以下の通り。

- (1) ウォーミングアップ
- (2) 補助運動
- (3) 主運動

2 場の工夫

以下4つの観点を意識して、場を設定してきた。

- (1) 子どもたちが興味をもてる
- (2) 子どもたちの実態に合っている
- (3) 安全である
- (4) 運動量を確保できる

3 友だちとの関わり

どの単元でも友だちとの関わりを大事にしながら、学習を進めてきた。

- (1) 水泳(水遊び)・・・バディーでのペア学習
- (2) バレー型・ベースボール型・・・チームでの話し合い
- (3) マット運動(遊び)・・・グループでの協力
- (4) ボール投げ運動・・・作戦→反省→実践

- (5) 体づくり(長なわ)・・・クラスで協力

等

●工夫したこと(&苦労した点)

- (1) スモールステップ
どの子どもでもできる易しい運動からスタートして少しずつ難易度を上げるようにしてきた。そうすることによって、子どもたちは無理なく取り組み、「やってみよう」「できる気がする」という前向きな気持ちをもつことができたと思う。
- (2) 見通しをもたせる
1時間の授業の見通しをもたせるため、ホワイトボードに流れを提示した。また、運動のコツやポイントを意識させ、取り組ませることができた。
- (3) ICTの活用
マット運動や跳び箱運動などにおいて、客観的に自分の動きを見せるため、活用した。訪問校ではよく活用できたが、本校ではあまりできなかったため、今後、しっかり活用していきたい。
- (4) 子ども達の関わり合い
ペア学習や教え合い、話し合いを積極的に取り入れてきた。関わりはもてたが、話し合いや教え合いの質を今後はもっと高めていかなければならない。

Check：取組の成果

- ① 高跳びの学習では、用具を工夫することで、子ども達がより意欲的・主体的に取り組むことができた。
- ② ボールを使った運動(バレーやベースボール型等)において、子どもの実態に即した場やルールにすることで、子どもがより取り組みやすい学習となった。

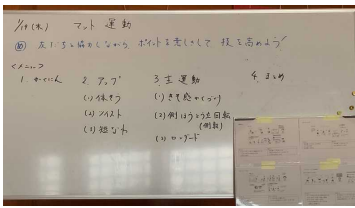
Action：今後の課題

- ① ICTの活用をさらに進めていく必要がある。
- ② 子ども達の関わり合いの質や量を高めていく。

◎体力向上の取組がもたらす波及効果

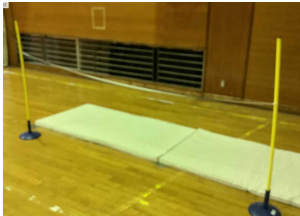
- 子ども達が自信をもち、積極性や自主性が高まるなど他の学習や活動への好影響が考えられる。

(流れ・ポイントの確認)



「ホワイトボード」
授業の冒頭で、学習の流れや技のポイントを提示することで、子どもたちに学習の見通しをもたせることができた。

(教材・場の工夫)



「走り高跳び」
触れても痛くないゴムを使用したため、子どもたちが安心して取り組むことができた。棒にメモリ（10cm単位）を予め書いておくことで、子どもたちでも容易に高さを変えることが可能となり、活動が活発になった。

(基礎感覚づくり・補助運動)



- (左) 準備体操の後に行う「ツイスト」
柔軟性やリズム感を高めることのほかにウォーミングアップにもなっている。本校の全学年が毎時間、授業の中で行っている。
- (右) 基礎感覚づくり「かえるの足うち」
お尻より下→お尻の高さ→お尻より上、というように少しずつ難易度を上げた。

(場の工夫)



「開脚跳び」
腰を上げることや助走のスピードに恐怖心がある子どもにとって有効な場の設定

別の跳び箱に乗せ、腰が高い状態から助走なしで跳ばせる。それでも恐怖心がある子どもには補助をしたり、セーフティーマットを前に敷いたりすることで恐怖心が緩和された。この場で跳べるようになると、普通の場でも跳べるようになった子が多く見られた。

(友だちとの関わり・協力)



「補助倒立」の様子

- ・倒立を行う人、補助する人、それぞれのポイントを確認後、実践。
- ・「できた！」「支えてくれてありがとう」とお互いを認め合う声をかけていた。